



## 「終着駅と道の駅としての役割」

医療法人敬仁会 函館おしま病院  
理事長・院長 福德 雅章 先生

6月に発足したNPO法人ホスピスのこのころ研究所(理事長 前野宏先生)設立記念講演会(札幌)で久しぶりに下稲葉康之先生のお話を拝聴した。クリスチャンドクターである下稲葉先生と私のホスピスへの玄関口は異なるが、かつて3年間という時間をご一緒させて頂き、さまざまな事を教えられた。先生の言葉をお借りして「ホスピスは人生道場」であるのなら、私は栄光ホスピス道場で稽古をつけてもらった弟子の1人であると勝手に思っている。故郷函館市にホスピスを開設し14年が経過していた。地域の中では一定の役割を担っていると自負していたが、何となくこれでいいのか?というもよもよした思いも抱いていた。「ホスピスケアは患者と家族間の深いコミュニケーションを持って完結する」。下稲葉先生のその言葉に、栄光ホスピスケアの深みを感じるとともに胸の中がすっきりした。

さて私が栄光病院で仕事をさせて頂いた時と今ではホスピス/緩和ケアを取り巻く環境は大きな変化を遂げ、ホスピス/緩和ケア病棟の役割も変わった。従来、ホスピス/緩和ケア病棟は専門的緩和ケアを提供する場であるとともにそこで生を終える看取りの場、即ち「終着駅」と考えられていた。私自身もかつては最期の時間を出来る限り苦痛無く穏やかに過ごして欲しいと願い、看取りを前提として患者、家族と向き合っていた。

ほとんどの方が振り返ったり立ち止まる間も無く、ただただ走り続け、身も心もずたずたになって入院して来られた中、これから先どう生きていけばいいのか迷い、また生きる意味ですら

見出せない人も多くいた。しかし苦痛が緩和され、スタッフや家族と深いコミュニケーションが築かれるうちに、これからのことを考え、中には治療に戻ったり、在宅療養を選択する方もいた。私はいつしかホスピス/緩和ケア病棟はそこで一度立ち止まり、これからの生き方を家族や医療者と共に考える通過点、即ち「道の駅」でもあると考えるようになった。「終着駅」としての役割がグリーフケア、スピリチュアルケアであれば、「道の駅」としての役割は意思決定支援、退院支援、在宅支援ということになるが、これらを完結するには単に症状緩和にとどまらず、包括的アプローチと地域全体でのチームアプローチが重要であろう。

私が在籍した時の栄光病院は単に入院を受け入れるだけでなく、ホスピス110番(相談)、ホスピス外来、在宅ホスピスにも既に取り組んでいた。患者、家族のニーズに応じて、既に「終着駅」と「道の駅」としての両方の役割を担い、地域の中でリーダーシップを取っていた。時代が今ようやく追いついたと言える。

ホスピス/緩和ケア病棟のもう1つの役割は、ホスピスのこころを地域全体に伝え、広める語り部としての使命であろう。今なおホスピスに関わり続けておられる下稲葉先生にはこれからもホスピスのこころの伝道師としてご活躍して欲しい、私個人的にはまだまだ稽古をつけて欲しいと願っている。

私はいつしかホスピス/緩和ケア病棟は、そこで一度立ち止まり

これからの生き方を家族や医療者と共に考える通過点、

即ち「道の駅」でもあると考えるようになった。

### 福德 雅章 (ふくとくまさあき)先生 プロフィール

1961年函館市出身。1986年金沢医科大学卒業後、同大学血液免疫内科助手・血液センター副部長・骨髄移植責任医師を兼務する。1998年栄光病院に勤務し、総合診療部長を務め、ホスピスも兼務する。2001年地元函館市に戻り、2002年医療法人敬仁会函館おしま病院理事長・院長就任後、2004年4月ホスピスを開設する。現在は南渡島地域包括緩和ケアネットワーク、道南在宅ケア研究会の代表も務めている。